

藤井克徳、星川安之 著

障害者とともに働く

朝日雅也（埼玉県立大学保健医療福祉学部）

本書のカテゴリー「ジュニア新書」の「ジュニア」の部分はいったん棚上げしておく。端的に言うと、障害のある人が働くことについて、その意義、歴史、実践的取り組み、そして課題に至るまで、誰もがわかりやすく、かつコンパクトに紹介する稀有な存在だ。

障害者が働くことへの関心が高まっている。障害者雇用率制度により企業や公的機関における障害者雇用が進められ、同時に福祉的就労と言われる障害者就労継続支援事業B型等に代表される働き方についてもさまざまな改善が図られている。一方で、障害者はなお、労働が福祉かの二者択一を迫る世界に留まっている。働くことは障害の有無にかかわらず人の営みにおいて重要である。日本も批准している国連の障害者権利条約は、障害者が働くことを権利として位置付け、各国政府に必要な施策の実施を求めている。この理念を実現するためには、どのような取り組みが必要なのか。本書は、障害に対する社会全体の正しい理解を基盤に、障害のある人が働くことの意義とめざすべき方向性とそのための具体的手段について考えさせてくれる。例えば、優生思想の克服、すべての人々に提供されるべきディーセント・ワークの追求、地域生活への移行を支える働くことの意味づけなど、障害者とともに働く社会を切り拓く鍵を端的に示す。

同時に豊富な事例が働く障害者の潜在能力を改めて示してくれるとともに、環境が変わることで可能性が広がることを的確に物語る。ICTの活用によって広がる職域など、障害者が担う仕事についての固

定的な考え方を一掃してくれる。

著者の藤井克徳氏は障害者の働くことを探求し続けてきた理論的実践家。現在はNPO法人日本障害者協議会代表、日本障害フォーラム副代表を務める等、まさに日本の当該分野の信頼できるリーダー。あとがきでも触れているように、ご自身の視覚障害の体験にも基づく説得力のある投げかけは読み手の心にも染み渡る。

もう一人の星川安之氏は、「共遊玩具」の開発をめざし、玩具メーカーに勤務するとともに、ユニバーサルデザインの普及を目指す公益財団法人「共用品推進機構」を立ち上げ、現在は理事として活躍。理念と実践の融合と発展が障害のある人の働く世界を広げてくれることを実感させる最強タッグでもある。

「働くことは生きること」、「障害者の働く現場から」、「希望する誰もが働くために」、「『ともに働く』にむけて大切なこと」の4つの章で構成される。このコンパクトな本に障害のある人が働くことについてのエッセンスが心地よく詰め込まれている。

さて、「ジュニア」を棚から戻そう。障害の有無に関わらず、そしてジュニア層のみならず、すべての人々の社会生活について考えるヒントにもなることに気づく。それは、本書の副題「自分らしく生きるために」に通じる普遍性である。全章に通底する「障害者が働きやすい社会はすべての人が働きやすい社会」の実現をジュニア層のみならず、この社会を共にする人々に実感させる手引きでもある。

（新書判・頁204 2020年 定価：902円（本体820円＋税）[ISBN978-4-00500925-1] 岩波書店刊）